

〔類聚名物考調度四〕屏風裏形 べうぶうらがた

今も屏風の裏形には雀形とて、必しも多く是を用ゆる。是ふるき物にて、春日權現験記の畫巻物のうちに、屏風のうらの方書るに、やはり今の雀形也。模様は墨にて黒く書て、地色は黃赤色にて、檜皮色の如し、薄き柿色なり。是等も鳥襟の類なるべし。今堂上方にて用ひらる、年賀の屏風も、裏は絹にて張て、朱にて雀形の如きものをおす也。蘇芳の方といへり、或人云、屏風の裏の雀形は雀にはあらで、比翼の鳥なりといへり、相おもふことのふかく、つがひはなれぬといふ縁なるべしといへり。是も口かしこきいひざまなれども、物にも見えす。その本據なし、依て信すべからず。〔源氏物語須磨十二〕色々の紙をつぎつ、手ならひをし給ふ、めづらしきさまなるからの綾などに、さまざまの繪どもをかきすさび給へる。屏風のおもてどもなど、いとめでたく見所あり。略下

〔河海抄須磨六〕屏風の表裏、有兩説と云々、然而此ものがたりには、繪のかたを表にもちひたり、紅葉の賀卷にも在之、或説云々、宇多西宮兩説也。宇多蘇芳の方を面に用、西宮説には繪を面とす。仍或屋の母屋廂の屏風のまつらひも、兩家各別也。此物語は、むねと西宮の説を本とするによりて、繪を面とする事有、其謂云々、永原抄

〔原中最秘抄上〕屏風の繪、おもてうら兩説あり。此物語には、繪のあるかたを面に用之、西宮左大臣、繪を面にする義をもちふる間、此物語、彼大臣事をかけり、一説は蘇芳の方を面になす、大臣大饗之時、此義也。又車寄の四枚屏風、蘇芳を面に用ひる也。

〔菅家文草詩五〕屏風扶

屈曲初知用。施來不畏風。質宜羅帳裏。功見玉筵中。人馬無來去。煙霞不始終。丹青知有巧。開合又西東。〔有徳院殿御實紀附録十六〕ある日御閑燕の御なぐさみに、御みづから十曲の聯屏に、水墨の山水をなされける。其さまいかにも磊落として、神逸の風韻をきはめられしかば、御みづからも御得